

# ティーム保育の実践的研究(1)

## —教師の連携による好きな遊びの充実について—

清水陽子・白土智子・松隈玲子

### Practice-based Research about Team Teaching in Early Childhood Education, Part 1: Fruitful Free-flowing Play Activities Coordinated by Child-care Professionals

Yoko SHIMIZU, Tomoko SHIRATSUCHI and Reiko MATSUKUMA

#### Abstract

It is conjectured that free-flowing play is the part of the day that most requires team teaching in early childhood education. This study set out to verify the relationships between the way childcare experts work in a group, the roles assigned among them in the kindergarten, and the way children play alone and link up with one another to enrich their associations. The study comprehensively analyzed the records of discussions held after caring for and educating pre-school children, as well as those of training sessions of kindergarten teachers carried out in the kindergarten.

Two cases, both during a play occurring at the start of during a new term and a soccer-play, showed that team teaching could be effectively introduced in a free-flowing play period of the day regardless of the season. Furthermore, it was found that forming classes was also important in team teaching in early childhood education.

Training on team teaching in childcare in the kindergarten was conducted seven times a year. Through out their daily practice of childcare, all teachers confirmed, the importance of building relationships so that they can talk about their troubles in childcare without hesitation, and discuss good ways to solve such problems for the sake of the children.

**Key words:** ティームティーチング—Team teaching      好きな遊び(自由遊び)—Free-flowing play  
保育実践—practice in early childhood care and education

#### はじめに

ティーム保育研究は、ここ数年保育学会や保育研修会等でも着目され、概念整理が進み、学校教育におけるティームティーチングとの違いが明確になってきた。ティーム保育の先行研究をみると、実践事例を中心とした研究が多くなされているが、その中でも、松村和子氏が保育のパラダイム変換を促す保育法として検討されている研究から、教師の役割分担を考える上で多くの示唆を受けた。<sup>1)</sup>

幼児教育におけるティーム保育の導入は、平成13年3月に文部科学省から発表された「幼児教育振興

プログラム」の中で、教師の資質・能力の向上方策としての多様な指導方法のひとつにあげられている。その理由は、一人の教師が保育する場合に比べて、ティーム保育を導入することで、子ども達によりきめ細かい指導や、豊かな関わりをすることが期待できるからである。

本園では、「一人ひとりの子どもを大切にする」という保育理念のもと、子どもの自主性や主体性を伸ばすと共に、一人ひとりの子どもの個性を尊重することを目的とした保育に取り組んできた。今回は、時代の要請に応えるために、これまでの実践を再考し、それぞれの教師が有機的に連携し、さらに子

も達にきめ細かい援助をするために、ティーム保育の研究とそのための園内研修を行うことにした。

## 1. 研究の目的

ティーム保育を実践するためには長期的な見通しが必要であると考え、期の指導計画の中で、ティーム保育の目標や取り組みの計画について協議した。そして、本園の一日の保育の中でティーム保育が最も必要な時間帯は、好きな遊びの時間ではないかとの仮説をたてた。好きな遊びの時間にティーム保育が必要と考えた理由は、下記の通りである。

- ・ それぞれの教師が子どもと共に自由に遊びを展開しているため、教師がお互いの行動を把握しにくいので、密に連携する必要性が高い。
- ・ 長期的な指導計画では予想しにくい、子どもの偶発的な遊びを援助するには、教師集団の柔軟な連携と対応が必要。
- ・ 好きな遊びの時間は、子どもの主体的な遊び活動を援助したり、様々な教師や異年齢の子ども達が、自由に交流できる環境構成をしやすい。

上記の理由から、好きな遊びの時間に、教師がどのような連携をし、役割分担をすることが、個々の子ども達の遊びにつながりを持たせ、友達や教師との関わりを豊かにするかを検証したい。

## 2. 研究の対象と方法

### (1) 研究の期間

2002年4月—2003年3月

### (2) 研究対象

西南女学院短期大学附属シオン山幼稚園全園児  
(2002年度の園児数127名—3歳児33名、4歳児—52名、5歳児—42名)

### (3) 研究の方法

- ① 年間のティーム保育の計画および期や週の指導計画を作成し、実践した後に個人記録票や保育日誌をもとに、日々の振り返りや協議を複数または全員の教師で行う。
- ② 各教師が作成したティーム保育の実践記録をもとに、園内研修を持つ。
- ③ 保育の記録および園内研修の記録から、総合的にティーム保育を実践する上で、教師の連携方法と役割分担について考察をする。

## 3. 研究の経過と結果

### 子どもにとって「好きな遊び」の持つ意味

子ども達にとって好きな遊びは、自分から興味や関心をもって環境と関わり、遊びや場所、友達を自由に選択して、心や身体を働かせて活動を展開する大切な時間である。そのためには、保育者との安定した関係の構築と自由な雰囲気、場、時間の保障が必要である。

子ども達が登園後身辺整理を終え、好きな遊びの時間を充実感を持って過ごしたかどうかで、その後のクラス活動への取り組みも変わってくるのが、これまでの保育実践後の話し合いを通し考察された。例えば、朝の遊びで充実感を持って過ごした子どもの多くは、教師の話に耳を傾ける、自分の意見を述べるなど主体的にクラス活動に参加しようとしていた。

自分のしたい遊びがみつからなかったり、登園時間が遅かったために好きな遊びの時間が十分に持てなかった子ども達の多くは、遊んでいないという欲求不満からクラス活動への参加を拒否したり、クラス活動に参加しても受身でただ着席をしているのみで、活動に集中できない姿が多く見られた。このような子どもの姿から、子ども達は好きな遊びの時間を充実して過ごすことで、気持ちが満たされ、新たな活動に意欲的に取り組むことができるのではないかと考えた。好きな遊びの時間を充実して過ごすためには、子ども達が自分のしたい遊び、気の合う友達、好きな場所を選択することが必要である。しかし、近年の少子化により、集団で遊ぶ経験の少ない子ども、室内でテレビなど創造性の少ない受身的な遊びで過ごしている子ども達が増えていることもあり、子ども達だけで遊びを選択したり展開することは難しいように思われた。そこで、子どもの興味を引き出したり、子どもと共に遊ぶ中で遊びを展開するという援助者の役割を担う教師によって、好きな遊びの時間を一人ひとりが充実して過ごすことが出来るのではないかと考えた。

### ティーム保育の取り組み

これまで、新学期のフリーの教師は、安全管理に重点を置いていたため、子どもと遊ぶよりもクラスに入れられない子どもの援助や全体的な子どもを見守る役割を担っていた。今回の研究の取り組みでは、担任教師が各々のクラスの母親的存在であることを大切にしながら、担任とフリーの教師が連携をとって情報交換をしあうことと、フリーの教師も子ども達の

遊びが充実したものとなるように援助する役割を持つチーム保育の実践に取り組むことになった。

### 事例1

#### フリーの教師の位置づけと担任教師との連携

新学期当初の年少児クラスには、母親が帰った後も不安な気持ちを持ち、遊びがみつけれない様子の子ども達が、クラスの3分の1程度いた。年中児クラスの進級児にとっては、同じクラスの新入園児が母子分離の不安から泣くために保育室にいても落ち着かなかつたり、担任を新入園児にとられたような満たされない気持ちのまま園庭に出てくる姿が見られた。年長児においては、園生活には慣れているものの、クラス替えに伴った人的環境の変化に戸惑いを見せる子どもの姿が見られた。このような子ども達の姿から、それぞれの担任とフリーの教師達が話し合い、子ども達の安全を確保しつつ、心の安定をはかることができるような役割分担や配慮を考えた。前述したように、新学期の子ども達が安心して遊びをはじめることが出来るように、担任教師は個々の子どもの受け入れと対応、フリーの教師は子ども達の遊びの充実と発展の役割を分担することになった。次にその実践事例としてブランコ遊びをとりあげる。

本園では、4月、5月の2ヶ月間、必ずブランコの前に順番を待つ子ども達の長い列ができていた。おそらくブランコ遊びだと友達関係が確立されていなくても、個人で遊べたり登園後の母親と離れたばかりで淋しい時、自分の居場所であるブランコで揺られる間に、気持ちが安定するためであろう。しかし、新学期で新入園児にとっては、まだ集団のルールが身につけていない時に、ブランコをめぐるの口論やブランコが空いたと同時に柵の中に入り、危険な状況が生じたこともあった。また、近年、事故防止のため、多くの公園からブランコが撤去されていることから、ブランコのこぎ方がわからない子ども、ブランコによる危険予知ができない子どもも増えている。前述した理由から、今年度は特にフリーのT・S教諭がブランコ遊びの担当となり、ブランコの乗り方や順番を楽しみながら待つことができることを目指してブランコ遊びの実践に取り組んだ。まず、はやいもの勝ちにならず、子ども達が安定して自分の順番を待つことができるようにブランコのそばにベンチを設置した。教師がブランコを汽車に、ベンチを駅に見立てると、子ども達は、お客さん役になって喜んで待つことができた。さらに待つ間にわらべ

うたを歌って遊び、待つ時間も楽しみが持てるように工夫した。数を知らない子どもにとって、ブランコを交代する合図として、わらべうたが終わったら交代するというルールを作ることで気持ちよく友達に譲る姿が見られた。ブランコをこげない子どもには、教師がひざに乗せてこぐことで、ブランコ遊びを楽しむようになった。これらをきっかけとして、ブランコ遊びを楽しみに登園する子ども、母子分離ができるようになる子ども、ブランコの順番を待つことができる子どもの姿がみられるようになった。

次に担任とフリーの教諭とのチーム保育により、気になる子どもを援助し、子どもの変容が見られた事例を挙げる。

年中クラスのA子は、ブランコを自分でこぐことができないので「先生押して」と援助を求めたかと思うと「もういい、もういい、自分ですの」といってはじっとブランコに座っているということがあった。また、友達と同じことができないというジレンマから泣いたり、かんしゃくを起こすこともあった。A子の担任に尋ねると、A子は近所の友達と共に本園に入園してきたK男、S子との三人でいつも一緒に行動していたため、何をしても同じでなければならないの思いがあるようで「Kくん、ブランコするっていったでしょ」「Sちゃんまってよ、A子もするよ」という姿が度々見られた。また、S子とK男は運動的な遊びが大好きで、ジャングルジムや鉄棒、ブランコも次々と習得していったが、A子は新しいことには恐怖感が先に立って、思うように二人と同じことができない。特に、幼稚園の園庭にはこれまで経験のない固定遊具も多く、A子には困難なことばかりといった状況であることがわかった。担任教師とも話し合い、A子がブランコをこげるようになることで自信を持ち、気持ちの安定につながるのではないかと考えた。また、A子には、何でも自分でしたいという自立心が強いことがわかったので、教師から働きかけてみてもよいのではないかと考えた。こうして、翌日からA子には少しずつブランコをこぐ時の膝の曲げ方や鎖の握り方を伝え、少しでもできた時には認めていったところ、自分からやってみようという意欲を持ち、7日後には立ちこぎもできるようになった。次第にA子の気持ちも安定し、K男やS子とも楽しそうに遊ぶ姿が見られた。

このように、子ども達の様子を個人記録票を通じて各担任に伝え、話し合って翌日の関わりにつなげていくことが、チーム保育の望ましいあり方の一つであると考えた。

## 考 察

これまでも新学期当初、フリーの教師が子ども達の安全を確保しつつ、特に気になった子どもについて各担任に報告がなされていたが、フリーの教師が発信者、担任教師が受信者という一方通行の形にとどまっていることが多かった。今回のティーム保育では、フリーの教師が担任の教師に子どもの様子を報告した事から話し合いが持たれ、フリーの教師にとっては新たな援助の方法を見出すことができた。担任教師にとっては、新入園児への個別への配慮が必要な新学期に、フリーの教師から受けた報告と個人記録票により継続して一人ひとりの育ちを細かく見ることができた。子ども達を多角的に見ることで、教師同士が学びあうことや、共に子どもの育ちをみていくという一体感が生まれ、教師同士の信頼が深まった。子ども達にとっても安定できる環境を作ることができたことは、ティーム保育の取り組みの成果であると考えられる。

## 事例 2

### 異年齢児交流の遊びをめざしたティーム保育

本年度の年長児クラスは、2クラス40名と少なく、3年保育の子どもも多かったので、男女の区別なく親しい関係が成立していた。しかし、中にはクラス替えにともない、親しかった友達と別のクラスになり、戸惑う姿も見られた。遊びの面においては、全体的にままたごと、製作遊び等室内での遊びを好む子どもが多いようであった。特に、新学期当初の年長男児は、年中の頃からの新聞紙や広告紙やブロックで戦いごっこの剣作りをすることが多く、自分達で遊びをつくり出したり、広げたりする姿があまり見られなかった。

また年中児クラスは、担任教師が登園時に新入園児への個別の対応に時間がかかり、登園後すぐに進級児に関わって遊ぶことができにくかった。進級児の新学期当初の遊びの様子は、目の前にあるブロックをつなぐ、ボールを蹴りあう、近くにいる友達とたたかいごっこをするなどで過ごす様子がみられた。本年度の年中児クラスの特徴として、自分の思いや考えを主張する子どもが多く、自分達で遊びを見つけ広げようとする気持ちはあるが、自分の思い通りにならないと行動できないという姿が見られた。また、自分の気持ちを言葉でうまく伝えられないために、泣いたりふくれたりすることが多く、クラス活動への参加が難しい子どもの姿も見られた。そこで、教師間で特に4月の子ども達が安心して参加できる

クラス活動について話し合い、フリーの教師との望ましい連携を考えた。話し合いの結果、新学期当初のクラス活動の時間は、担任が活動をリードする役割をとり、フリーの教師が個別の援助をする役割を分担することにした。

5月中旬のある日、年中児の男児2名が園庭でサッカーボールを蹴りあっていた。その様子を遠くから年長の男児4名が見ていた。そこで、フリーの教師が遊びに加わると、すぐに年長児も「入れて」とやってきた。この事を担任教師に伝えると、参加した年長児は遊びを見つけられない子ども、集中して遊べない子ども達であったことがわかり、引き続き遊びを援助していく必要性を感じた。また、年長児にとってはダイナミックに遊ぶおもしろさを伝えたい、年中児にとっては、ルールのある集団遊びのおもしろさ、異年齢の子どもとの遊びを経験してほしいという教師の願いと、クラスの中で個別の援助を要する子ども達が少なくなったこともあり、フリーの教師が継続してサッカー遊びに関わっていくことになった。

### 異年齢交流による担任教師とフリーの教師との連携

前述した子どもの姿から、好きな遊びの時間のサッカー遊びについてティーム保育の観点から、その経過を別表のようにまとめた。(P.50、51参照)

#### 考 察

表に記載したサッカー遊びは10月の運動会後も継続した。

今回のサッカー遊びでは、「みんなのせんせい」であるフリーの教師が、遊びのリーダー役になったことで、他年級の子も達が集いやすかった。

また、サッカーの試合をし、保育室に戻る時に多くの子ども達から「ただいま」と言う姿がみられたが、これはクラスの担任から離れて過ごすことで、「自分のクラス」という意識が深まったのではないかと考えた。日々、個人記録票や話し合いによって情報交換をしていたことで、担任は安心して子ども達を送り出し、その報告を聞くことで子どもへの見方や関わり方に広がりがあった。フリーの教師は、クラス活動や生活面において担任が育てたいと願っていることを具体的に知ることによって、子どもへの援助の視点を担任と同じにすることができた。

子ども達の生き生きとした表情や姿は、気の合う仲間と好きな遊びの時間を充実して過ごし、十分に気持ちが満たされた時に表れる。サッカーごっこの時間においては、教師は審判役であり、子ども達は

年長児、年中児に関わらず選手になったつもりで楽しめた。遊び場所と自分の役が確定していることで、より継続してじっくりと遊びこむ事ができたのだと思われる。継続して遊ぶことができたため、仲間意識も強くなり、遊びの中で衝突や好ましくない姿が見られた時に、友達同士で話し合ったり、指摘し合う姿も見られるようになった。自然とリーダーシップをとる子どもも生まれ、異年齢児がふれあって遊ぶ中で年長児には、年上としての自覚が芽生えるきっかけとなった。年中児においてもルールのある集団遊びを通じて、ルールを守ることの大切さを理解し、そのことで遊びがおもしろくなることを感じたようである。

遊びをより豊かにするためには、新学期は特に遊びのリーダーとなる教師が必要である。しかし、一人の教師が継続して遊びに関わるためには、全教師の理解と協力が必要があることがわかった。今回のサッカー遊びでチーム保育をすることで、サッカーの試合だけでなく、チアガールが担任と共に作ったボンボンを持って応援にきたり、サポーターがみんなで作った弁当や栄養ドリンクを持って選手の応援にくるなど、遊びの広がり生まれ総合的な遊びになった。また、子どもの様子の情報交換や話し合いを密にすることで、子どもの見方が深まったり、子どもの遊びを多角的に援助するなど、教師がお互いに保育方法を学び合う機会となった。

これまでの本園でのサッカー遊びでは、フリーの教師は園庭での安全確保や各クラスの補助が優先で、遊びに継続して加わることは難しかったので、遊びのリーダー役は各々の担任教師が担っていた。しかし、担任が園庭に出られる時間にならないと、遊びが始まらないので開始時間が一定でない、継続できないなどや、また担任教師に関わることで、そのクラス以外の子ども達にとっては遊びに入りにくいこともあるなど、異年齢の子ども達が交流し継続して遊ぶのは難しかった。

また、好きな遊びの時間について担任教師とフリーの教師が詳細な情報交換を定期的にしていなかったため、その場で関わった教師の裁量に任されていたこともあったのではないと思われる。今回のチーム保育では、教師が役割を決めて担当したが、今後は教師が役割を交代しても、遊びが成立するようなチーム保育の方法を検討することが課題である。

#### 4. チーム保育についての総合的考察

##### (1) 実践事例を中心に

新学期における保育は、まず第一に安全性が重視されるのは自明のことであるが、担任とフリーの教師が連携する事で、安全性が確保されるだけでなく、子どもの気になる行動の動機やその背景を理解し、適切な援助を考えることができた。また、それぞれの教師が子どもの変容の姿を伝えることで、クラスの子も達が共有できる遊びのきっかけを担任が作りやすくなった。事例としてあげたブランコ遊びは、ブランコに乗る目的で集った子どもにとって、乗っている時間だけでなく、待つ時間にも意味があり、友達との関わりも生まれるようにわらべうた遊びを取り入れることによって、さらに楽しさを共有できたのではないかと考える。このように、一人の教師の工夫や関わりおよび子どもの姿の変容を、他の教師に伝えることで、他の教師も自分の援助法として取り入れ、他の保育場面でも応用できることが、チーム保育の利点であると考えられる。

好きな遊びの時間に一人ひとりの子ども達にきめ細かい指導を行うことの必要性は共通理解していたことであったが、具体的に、いつ、どの教師が、どの子ども達の遊びのグループのリーダー的存在になるかを考えて、全園的に実践するには、日々変化する子どもの姿に基いた綿密な打ち合わせをしなければできない事を再確認した。

サッカー遊びの事例では、リーダーとなる教師を固定したことにより、継続して一人の教師が遊びを展開したため、子どもの育ちに気づきやすかったという利点があった。しかし、サッカー遊びの担当はT.S先生という固定観念を、子ども達や教師達の中に植え付けることにもなった。今年度の5月下旬に、クラス担任と交代で担当するなどの交代制を導入すれば、担任と一緒に行動したがる子どもも参加しやすいのではとの意見が出された。話し合いの結果、2クラスの年長児のクラス担任もサッカー遊びに参加したことで、サッカー遊びに参加する子どもの固定化傾向がなくなり、友達関係が広がった。

しかし、昨年からの交代制を導入すればよかったのかといえば一概には言えない。担当する教師が交代する時期は、教師間で事前に検討することが必要であろう。

前述した事例から、好きな遊びにおけるチーム保育の方法として、主に下記の2つをあげることができる。

- ・ 全園的な教師の役割分担を話し合い、継続して担当する教師が決まることによって、子ども達に遊びの見通しを与え、遊びのグループに入りやすくするきっかけをつくりやすい。
- ・ 教師同士が遊びの情報を共有することで、クラスの子ども集団への遊びの伝え合いがいかされやすくなり、クラスの子ども達の共有体験にすることができる。

チーム保育に取り組む以前の好きな遊びの時間は、場所やコーナーで教師が役割を分担することが多かった。それだけでなく、子どもの遊びの要求に気づき、それが実現できるように、柔軟に役割分担ができるようになることが必要である。また、チーム保育の取り組みを通して、全員の教師が自分が保育の中で気づいたことや困ったことを遠慮なく出し合って、どのような方法をとることが、子ども達にとってよいことかを話し合う関係に変容する事の大切さを確認できた。

## (2) 教師の育ちと変容を中心に

チーム保育の研究と実践にあたり、シオン山幼稚園にふさわしいチーム保育を創り出すことが必要であると考え、主体的な園内研修をスタートした。7回の園内研修のうち、必要に応じて本学保育科原孝成助教授に第三者として専門の立場から参加していただいた。

理論と実践双方に視点を置き、先ず先行研究として松村和子氏、森上史朗氏、柏木敦氏の論文とまんとみ幼稚園、静岡豊田幼稚園の実践記録をもとに研修を行った。<sup>2)</sup> この学びを通して、チーム保育とは何か、チーム保育を実践するにあたっては、その園にもっともふさわしいものを創造していくことの大切さを共通理解することが出来た。

その結果、シオン山幼稚園では、担任教師と子ども達とのクラス集団をファミリークラスとして大切に考え、保育の活動や場にに応じてクラス集団と保育集団とを同一のものにしない保育の取り組みができないかと考え、連携の方法を話し合った。チーム保育の実践にあたり、教師全員で討議し共通理解することを大切にしたいと考えたからである。

園内研修、保育終了後のミーティング、チーム保育の実践を重ねることによって、個々の教師、および教師集団の育ちと変容が見られた。このことが今回のチーム保育の実践にあたり意義あるものであると考え、研修や保育の振り返りの際の記録の中から主なものを取りあげて教師の育ちと変容につい

て考察する。

- ・ 先行研究に学ぶことの大切さを確認できた。特にチーム保育は教師が複数いるということだけでなく、その関係がどのような構造になっているか、連携と協働がなされているかという視点で保育を見ることが大切であることを、共通理解することが出来た。
- ・ チーム保育の複数の教師は主副の関係ではなく、保育の計画段階から共に関わり、役割を分担することによって複眼的に子どもをとらえることの大切さを実践を通して実感できた。チーム保育を実践することによって、他の教師の持ち味をいかした保育を学ぶことが出来、自分のクラスの子どもを客観的に見る機会となった。また保育のふり返りや話し合いの中から自分が見すごしていた子どもの姿に気づくことが多く、他の教師と連携する保育が楽しいと思えるようになった。
- ・ フリーの教師に対する位置づけやとらえ方が変容した。事例1に述べたように、新学期当初のフリーの教師の役割は、援助を要する子どもへの手助け、遊び場の安全管理、片付けなど担任教師の補助として保育がスムーズに展開することであると捉えられることが多かった。しかし、幼稚園における好きな遊びの時間は、チーム保育を実践するのに適切な場であるということから、子どもの安全を保障しながら、個と集団の遊びを充実する手だてを教師全員で話し合った。その結果、保育室および園庭の遊び場マップと教師の配置図の作成、特に物理的な場の担当ばかりでなく、心くぼりの出来る範囲の重なり合いを大切に考えることに留意した。このことを通して、遊びのリーダー役になるなどフリーの教師の役割と位置づけが明確になり、担任同士、担任とフリーの教師との連携についての共通理解が出来た。
- ・ 好きな遊びの時間の保育実践の変容。保育終了後のミーティングにおいて、これまでクラス報告が中心であったが、チーム保育の取り組みにより、まず好きな遊びの状況や子どもの様子が各教師から個人記録票をもとに報告されるようになった。記録を書くことで文章化することに抵抗がなくなり、ポイントをまとめて記述することや、他の教師の記録から学ぶことが多く、保護者への伝達に役立った。好きな遊びの時間の担任とフリーとの連携、フリー同士の連携がスムーズに行われるようになると、教師自身が仲間を支えられているという安心感をもって保育に取り組むことが出

来た。事例2のサッカー遊びに見られるように、好きな遊びの時間を異年齢交流にふさわしい場であるという教師間の共通理解と支援意識の高まりによってフリーの教師の継続した遊びへの参加が実現した。また教師の連携によって、サッカー遊びが単なる試合ではなく、万国旗づくり、チアガール、弁当づくり、サポーターなど、それぞれの役になりきって、年級をこえた多様な遊びとして長期間継続された。

以上のようにティーム保育の研究と実践の取り組みを通して、それぞれの教師の保育観の育ちと変容を見ることが出来た。その一番大きなものは教師が自分も子どもも、単なる個ではなく、集団の中の個、集団との関わりの中にある個であることを認識し、まわりに支えられているという安心感をもって保育の実践に取り組むことが出来るようになったことである。

## 5. まとめと今後の課題

ティーム保育の導入方法について考察すると、年間を通して好きな遊びの時間がティーム保育の実践に適した時間であると言える。また、新学期も、子どもの姿を予想して、保育計画の中で役割分担や連携方法を考えておくと、単なる安全確保だけでなく子どもの心の安定がはかりやすく、遊びも充実する

ことが明らかになった。好きな遊びを終えて、それぞれのクラスに帰った子どもを迎える担任の姿は、さながら帰宅した子どもの報告を聞く母親のようであった。また、その後のクラス活動においては、好きな遊びを報告する時間を持つことで、家庭における団欒のように、クラス子ども達が個々の体験を共有する時間となった。ティーム保育とクラス的重要性については、森上史朗氏も指摘していることだが、教師の連携によりクラスを核とした実践ができたことは、ティーム保育の成果であると考えられる。<sup>3)</sup>

本研究の今後の課題としては、次のことに留意して実践研究を続けて行きたい。

- ・ 全員の教師が子どもの視点から発信したり、受信したりできることと、自分の保育の意図や子どもとの関わりを、教師集団にフィードバックすることを習慣化する。
- ・ 子どもの情報を共有しただけでは、教師が同じ方法や方向の援助をしがちなので、共有した情報をもとにそれぞれの教師の立場によって、連携の方法を考え合う。

教師集団はその成員が自覚する否に関わらず、子どもにとっては保育に携わるひとつのティームである。教師自身が自分の置かれた位置を自覚するだけでなく、他の教師の働きを理解し、今後もお互いに信頼感を持って役割を遂行し、共に成長する教師集団として、実践研究に取り組みたい。

## 註

- 1) 松村和子「ティーム保育を考えるー保育のパラダイム変換を促す保育法ー」文教学院大学研究紀要 Vol.3, No.1, pp.13-26 2001
- 2) 園内研修で取り上げた先行研究は、次の5つである。松村和子「ティーム保育を考えるー保育のパラダイム変換を促す保育法ー」、森上史朗「現代における保育改革の課題」『乳幼児の教育』第96号(2001) キュックリヒ記念財団、柏木敦「チーム・ティーチングの原理と課題」『保育の実践と研究』Vol.5, No.1 (2000), pp.27-37 スペース新社保育研究室、平井信義『形態自在な園生活』生活ジャーナル(1999)、静岡豊田幼稚園「一人一人に応じたきめ細かな指導を行うためのティーム保育の在りかたについて」平成13、14年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校研究発表会資料
- 3) 前掲森上史朗「現代における保育改革の課題」『乳幼児の教育』 p.16

## 参考文献

- 1) 「子ども達がのびのびと自分らしさを発揮するための望ましい教師の連携と援助ーティーム保育の実践と園内研修による教師の意識の変容ー」西南女学院短期大学附属シオン山幼稚園 北九州市私立幼稚園連盟教師研修大会資料 2003年7月23日
- 2) 新井邦男 天竺茂編『学習の総合化をめざすティーム・ティーチング事典』1999 教育出版
- 3) 秋田喜代美編著『新しい幼稚園教育要領と実践事例集4 教師のさまざまな役割』2002 チャイルド社

付記 本研究は、本学の2002年度特別研究費を受けて行ったものである。

サッカー遊びにおけるクラス担任教師と

ティーム保育の必要性があると考えた場面・理由

ティーム保育の内容・

5月

好きな遊びの時間に、年中児2名がサッカーボールの蹴りあいをしていましたが、ただの蹴りあいではなく時間をすごしている。周囲では、遊びをさがしている年長児が、じっとボール遊びの様子を見ている。この遊びを充実する為には、教師が遊びに加わり継続して関わる必要があるのではないかと考え、フリーのT・S教諭が遊びに加わることにした。このことを好きな遊びの時間の報告で提案した。



提案を受け、好きな遊びの時間のサッカーし、フリーのT・S教諭が当分の間、各担任とになった。フリーの教師が加わってシュー回数を競ったりするゲームを子ども達に提性ができた。

フリーのT・S教諭を中心に、年中・年長児が約15名集まり簡単なルールで試合がはじまったが、ルールを知らない子どもと知っている子どもとの差が大きくなった。異年齢児が試合の形式をとりいれてサッカー遊びをする際には、正式なサッカーのルールばかりでなく、幼稚園で遊ぶ状況に応じてのルールを子ども達と共に取り決めたり、その都度ルールを伝える教師が必要である。そのためには全教師の共通理解が必要であると考えた。



フリーのT・S教諭はサッカー遊びのルール会で全教師に伝え、共通の理解を持つようにサッカー遊びには引き続きフリーのT・S教師ことになった。

6月

サッカー遊びをする子ども達の顔ぶれが定まってきた。担任教師がいつもサッカー遊びをしている子ども達の様子をより詳しく把握したいという要望が出された。定期的にサッカー遊びの様子を、参加している子ども達の様子を担当教師に伝えるにはどうすればよいかを話し合った。これまでサッカー遊びの様子を、各担任教師に口頭で伝えてきたが、別の方法を考える必要があるのではないかと考えた。



遊びを担当しているフリーの教師からサッ師へ必要に応じて口頭のみでなく、個人記録した。さらに、全体の週案の打ち合わせの中でも、コーナーと共に、個々の子どもや遊びの状況を計画した。

フリーのT・S教諭が継続してサッカー遊びに入ることで、園庭のブランコ周辺の安全確保が不十分となり、ブランコを出す時間に制限ができた。子ども達に好きな遊びを保障するためには、フリーの教師以外でブランコ遊びの安全な環境構成を考える必要がある。



教師会で話し合い、ブランコの安全な環境受け持つことにした。週案の話し合いの中で好きな遊びの時間を計画した。

9月

9月に入り、年少の男児3名がサッカー遊びをしたいと加わってきた。しかし年長児と同じように試合をするには、力の差がありすぎるので難しい。そこで年長児が年少児のシュート練習の相手となって遊ぶようになった。それ以外に年少児のクラスでもサッカー遊びを楽しむ方法について年少児の担任教師と共に考えた。



年少担当の教師と相談し、年中・年長児の2名がキーパーとディフェンス役となり、年な場を準備すること、運動会の種目の中にした玉入れ式サッカーを取り入れることになった。

サッカーをするメンバーが固定化してきた。そのため女児や室内で遊ぶことの好きな子ども達にとっては、いつも、サッカーへ出掛けていく子どもたちと遊べない状況になり、時々、友達をさがしている姿が見られる。同じ遊びはしなくても、場所を共有して好きな友達と、遊びの雰囲気を感じあうことはできるのではないかと考えた。そのためには教師の連携が必要であると考え、教師会で連携の方法を検討した。



担任教師やサッカーをしている子ども達を通が行き渡っていたこともあり、室内で製作遊び援という形でサッカー遊びに加わることができ・年中児・・・ずずらんテープでポンポンを作っ・年長児・・・紙で弁当や栄養ドリンク、メガホポーター役になる。

9月より年長にS男が転入してきた。S男はサッカー遊びが好きだったため、サッカー遊びをフリーの教師や一部の子どもとすることが多かった。しかしこのままでは担任やクラスの友達(サッカーをしない子ども達)との関係が、持ちにくい状態になるのではないかと心配である。S男の担任の教師と連携をとりながら、S男がクラスになじむことができる手立てを考えたい。



担任との話し合いにより、その時の遊びの遊びが終了して、片付けの時にS男の様子をすようにしていった。また、クラスの中でも試していくと、周囲の子ども達もS男のことを認め、た、S男も自信を持ち、自分から友達や教師るようになった。

10月

ワールドカップで世界の国々の名前を知ったことにより、試合前にお気に入りの国の名前をチーム名につけていた。しかし、耳から入った情報のため正確な国名を覚えていない子ども達が多かった。子ども達が正しい国名を知ったり、興味を広げるにはどのような方法があるのだろうか。せっかく興味を持ち始めているのだから、保育の中で年長の担任がとりあげることができないか、と考えてクラス担任との話し合いを行った。



年長クラスの教師とフリーの教師で話し合っ「こっきのえほん」や「せかいのことはあそびえコーナー、世界地図の掲示など、他の国々に



## フリーの教師との連携 (2002年度5月～10月)

### 具体的な取り組み

### 取り組みの結果と考察

遊びについて教師間の話し合いを連携をとりながら継続して担当することする場所を定めたり、シュートする案し、ボールの蹴りあい遊びに方向

年中児は何となくボールの蹴りあいをしていたのが、教師の援助でゲームらしくなり、子ども達が遊びに集中するようになった。また、フリーの教諭が仲間として遊んだことで、周囲で見ていたH男、K男など4・5人の年長児も加わり、年長児と年中児の異年齢交流の遊びとなった。遊びの様子やメンバーを担当に報告すると、年長児の中のH男やK男は遊びを主体的に見つけられず、担任が気にしている子どもでもあることがわかった。異年齢児共通の遊びを深めるため、引き続きフリーのT・S教諭が入って、遊びが充実するように関わることが教師間で了承された。

や試合の状況、人数など毎日の教師が常時、審判役として遊びに加わる

朝、クラスでの子どもの受け入れ時間に、各々のクラス担任と役割を分担し、T・S教諭が常時サッカー遊びを担当することで、毎朝、ほぼ同じ時間にサッカーを開始することができ、遊びの継続性を高めることができた。また、年中・年長と年齢に差があっても、教師が間に入ることでルールの共通理解をはかりやすいことがわかった。

カーに参加している年中・年長の教票の記録を通して報告することにし  
遊びのコーナーの報告として他のを全教師に伝え合うことになった。

個人記録票を通じて、担任教師へ、子ども達のつぶやきや、けんかの経緯などを伝えていたところ、担任教師からも、個々の子どもについてのクラス活動や生活面における詳細な報告を受けるようになった。それにより、フリーの教師も担任教師と同じ視点で子どもたちと関わるできるようになった。週案の打ち合わせで、好きな遊び時間の教師の配置を決めることで、自分のクラスの子ども達だけでなく、受け持ちの場にいる子ども達の姿もとらえられるようになってきた。

構成を園庭に出ている教師が交代で  
子どもの活動を予想した教師の配置

5月下旬に入り、子ども達の活動範囲が広がったため、園庭で遊ぶ教師の人数が十分ではなくなった。新学期当初は、ブランコの安全な乗り方などを重点的に指導することが多かったが、子ども達が安全なブランコの遊び方を身に付けたので、距離をおいて見守ることを教師間で確認しあった。そこで、各クラスで再度、ブランコの乗り方について伝えたり、教師一人あたりが担当する遊び場の範囲を広げることにした。

試合のあと、年中・年長児一人ずつ  
少児が試合の雰囲気味わえるよう  
年長、年少合同でボールを複数使用  
した。

玉入れ式サッカーでは、年少児と年長児のグループに分けたが、サッカーに興味の持てない年少の子ども達(特に女児)にとっては、圧倒されて泣き出す姿も見られた。そこで、年少の女児に実際にボールを蹴るといことよりも他に、年少児なりのサッカーの遊び方があるのではないかと年少担当の教師と再度検討した。

じて各クラスでサッカー遊びの情報をしていた教師の誘いかけにより  
るようになった。  
てチャリダーになる。  
ンを作り、レジャーシートを持ってサ

これまでサッカーに参加していなかった子どもの中からサポーター役で観戦していたことで、遊びの内容を理解し、新たにサッカー遊びに加わる子どもがでてきた。また、逆に毎日サッカーをしていた子ども達が午前中はサッカー、午後はお弁当作り(製作遊び)へと、他の遊びにも自然と興味が広がるようになった。

様子を記録した個人記録票とは別に  
伝え、担任から本児を認めたり励ま  
合の具体的な様子を伝えるようにし  
応援しようとする姿が見られた。ま  
に話し掛けたり、関わりを持つとす

具体的に試合の様子を伝えることで、子ども達同士で「シュートが決まる子はえらい」というような雰囲気が生まれ「Kくんはシュートができるから強い」等という言葉をよく口にするようになった。子ども達がこのような見方をするのではなく、それぞれの子どもの良さを見つめることができるように、サッカーにおいてはシュートをする子どものそばでサポート役をした子どもの姿を捉え、教師が他の子どもにも伝えていった。また他の遊びや生活面においても担任とフリーの教師が共通理解をし、同じように関わったところ、子ども達の意識が変わってきた。

た結果、各クラスの絵本コーナーに  
ほん」を用意したり、旗作りのでき  
も興味を持てるような環境を作った。

製作活動に苦手意識の強かったKが、自分の好きなチームの旗を作りたいという思いになり、自分で絵の具を用意し旗を作ろうとする姿が見られた。Kはあこがれの選手になったつもりで「旗を描きたい」という意欲をもつようになった。旗作りの当初は、作った国旗を持ち帰ったり、室内に飾っていたが、10月に入ると運動会の万国旗作りに全員で楽しく取り組んだ。運動会には手作りの万国旗の下で年少、年長の合同競技「シオン山カップ」を楽しんだ。